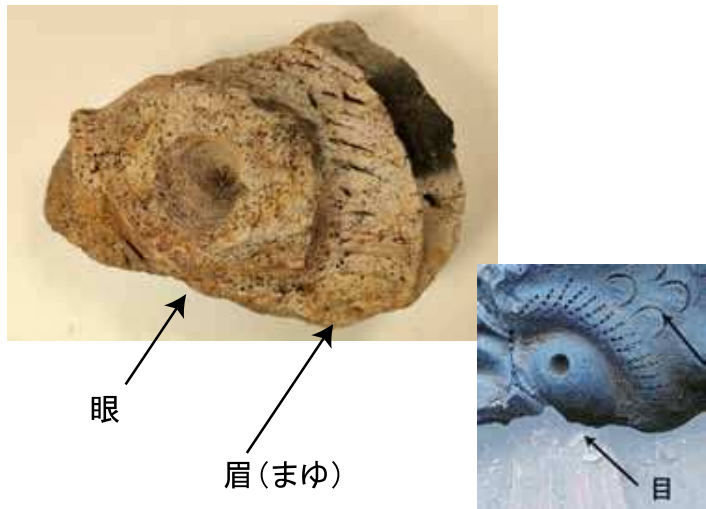
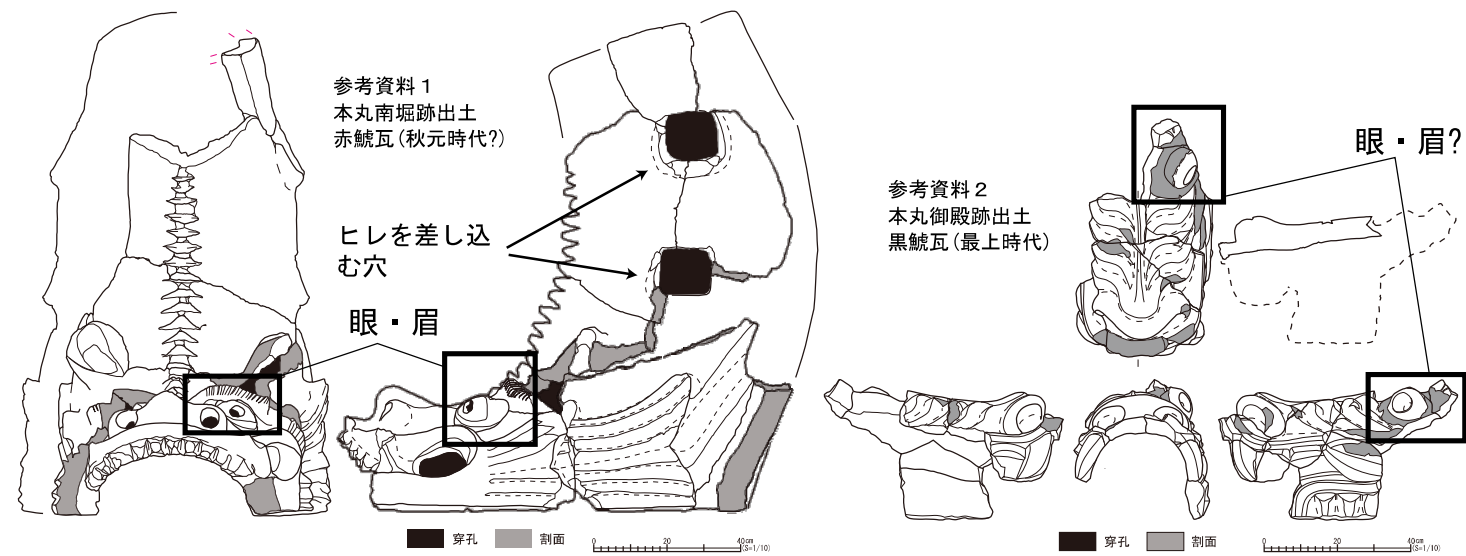


4 本丸北堀跡(北東部)出土の黒鯨瓦(眼部) 5 本丸北土塁裾北東部の「瓦捨て場」

本丸北堀跡（北東部）の瓦捨て場より出土したもので、黒鯨瓦の右側眼部です。表面が著しく剥がれていますが、眼の円形の孔(あな)の痕跡が残っています。また、その周囲には工具で筋状に刻まれた線刻が認められます。これは、瓦を作る際の工程で『カキヤブリ』と呼ばれる接合痕です。ヘラやクシ状の工具（この工具をカキヤブリと呼ぶ場合もあるそうです）で凹凸をつけることで接合強度をあげるためのものです。そのため、この痕跡は眼の上の「眉(まゆ)」を接合したものと考えられます。昨年度出土した鯨瓦と比較すると理解出来ます。この鯨瓦は北土塁北東部瓦捨て場から出土したことは、当時本丸北東隅櫓『良(うしとら)櫓』に葺かれていたことを示すものと考えています。



黒鯨瓦の出土状況及び部位名称位置図



編集後記
現地説明会開催に当たり関係各位に多大なご理解・ご協力を賜りましたこと誠に感謝申し上げます。なお、山形城跡の復原整備事業に係り関連する資料を探しています。お心当たりの方は下記までご連絡下さいますようお願いいたします。
【お問い合わせ先】〒990-8540 山形県山形市旅籠町二丁目3番25号 山形市まちづくり政策部公園緑地課 TEL023(641)1212(代)
【編集・発行】山形市企画調整部 文化創造都市課 文化財係

史跡山形城跡(2023) 本丸北堀土塁跡発掘調査 現地説明会資料

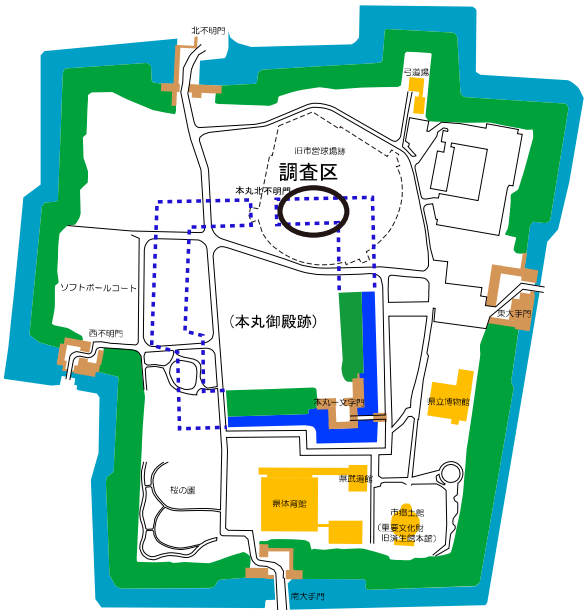
令和5年11月25日(土) 山形市 企画調整部 文化創造都市課

調査要項

遺跡名	国指定史跡 山形城跡
所在地	山形市霞城町(霞城公園)
遺跡番号	1番(山形県遺跡地図)
調査期間	令和4年5月11日～11月30日(予定)
調査面積	本丸北堀土塁跡(北東部) 約800㎡
調査原因	史跡山形城跡(霞城公園)整備事業(文化庁補助事業)
遺跡種別	城郭(近世城郭)
時代	近世・近現代
遺構	堀跡・土塁中段石積遺構・土塁下段石積遺構・護岸石垣 など
遺物	瓦類・陶磁器碗皿類・土師質土器・金属製品・石製品・須恵器土師器 など
整備事業の主体	山形市まちづくり政策部公園緑地課
調査担当	山形市企画調整部 文化創造都市課

1 概要(史跡の立地及び周辺の環境)

山形城跡は、最上義光が整備したといわれる本丸・二ノ丸・三ノ丸からなる平城です。昭和61年に国史跡指定を受けて以来整備に取り組み、二ノ丸東大手門や本丸一文字門石垣などを復原し、新たなシンボルとなっています。平成23年度より本丸西堀跡の調査と整備、同24年度より本丸御殿跡の発掘調査を行い、最上氏時代の本丸の遺構を発見しています。令和元年度からは、旧市営球場跡地にかかわる「本丸北堀土塁跡・北不明門跡」発掘調査を文化庁の補助を受けて行っています。城跡の周囲は市街地となっており、その中心に位置します。市街北部を流れる馬見ヶ崎川による扇状地上に立地し、本丸一文字門付近で海拔約130mを測り湧水地帯に築かれた平城であったと考えられます。今回公開する「北堀土塁跡(北東部)」では堀跡の屈曲部分を検出しました。また、土塁範囲からは江戸初期の最上氏時代の山形城に係る遺構・遺物を発見しました。



第1図 山形城跡調査区位置図

歴代藩主年表

和暦	西暦	藩主	石高
延文元年	一三五六	斯波兼頼	
慶長五年	一六〇〇	最上義光	
		最上家親	五十七万石
元和八年	一六二二	最上家信(義俊)	
寛永十三年	一六三六	鳥居忠政	二十万石
寛永二十年	一六四三	鳥居忠恒	二十万石
正保元年	一六四四	保科正之	二十万石
慶安元年	一六四八	幕府領	
寛文八年	一六六八	(結城)松平直基	十五万石
		(奥平)松平忠弘	十五万石
		奥平昌能	九万石
		奥平昌章	九万石
		堀田正仲	一〇万石
		(結城)松平直矩	一〇万石
		(奥平)松平忠弘	一〇万石
		(奥平)松平忠雅	一〇万石
		堀田正虎	一〇万石
		堀田正春	一〇万石
		堀田正亮	一〇万石
		(大給)松平乗佑	六万石
		幕府領	
		秋元涼朝	六万石
		秋元永朝	六万石
		秋元久朝	六万石
		秋元志朝	六万石
		水野忠精	六万石
		水野忠弘	五万石

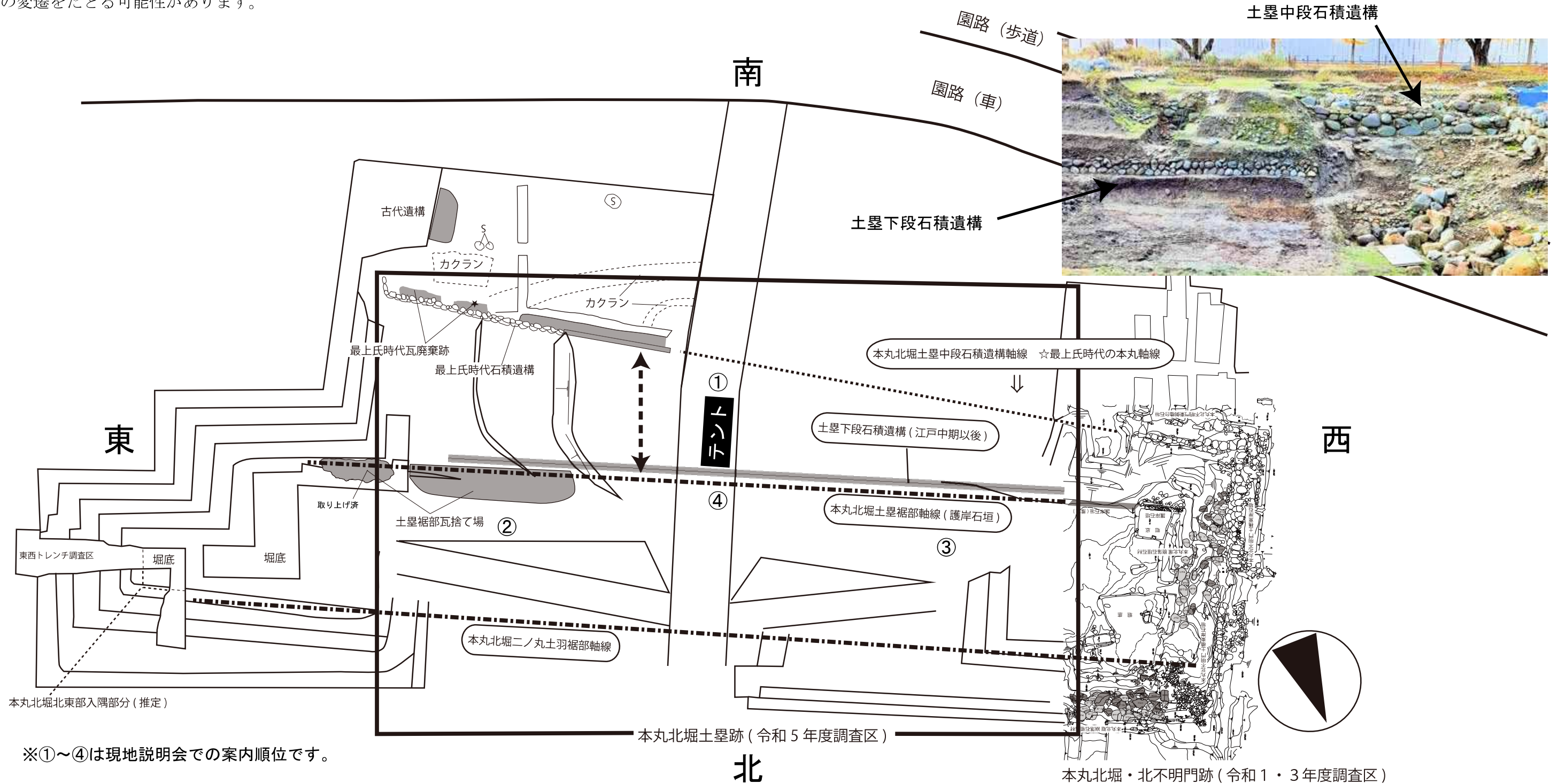
2 本丸北堀土塁跡【北東部】発掘調査の成果

【本丸北堀跡北東部】～土塁裾部の瓦捨て場の広がり～

令和4年度に確認した北東部を継続調査した結果、「瓦捨て場」の広がり、「土塁中段石積遺構」の延伸を確認しました。また、新たに「土塁下段石積遺構」と命名した遺構を発見しました（下段石積遺構については3にて詳述します）。瓦捨て場は新たに15mに渡り広がり認め、更に西側に延びるようです。前年度発見した範囲を加え全長25m以上に渡るようです。瓦は一部のみ取り上げていますが、黒瓦9割：赤瓦1割の比率で昨年度同様です。

出土遺物では、黒鯰(シチ)瓦・赤鯰瓦の一部が出土しました。黒鯰瓦は眼の周囲の一部です。赤鯰瓦は尾の先端部の一部です。製作年代を特定する証拠はありませんが赤鯰瓦は江戸中期以降で、黒鯰瓦はそれ以前と推測しています。

この鯰瓦の出土は、本丸北東隅の土塁上にあった『艮ノ方櫓』由来の瓦であることを示しており、二階建て建物の瓦を多量に含んでいるため、今後の調査では「鳥居氏」時代から「水野氏」時代の変遷をたどる可能性があります。



3 本丸北土塁跡【土羽下部】発掘調査の成果

【本丸北土塁跡】～土塁下部の新たな下段石積遺構の発見とその役割・機能～

令和5年度の発掘調査で新たな『土塁下段石積遺構』を発見しました。それまで土塁裾部に「護岸石垣」があり、堀水による土塁の洗掘（水の作用で土砂が崩れること）予防対策がなされていることが確認されていました。「土塁下段石積遺構」は護岸石垣の上位にあたります。しかし、調査の結果護岸石垣の構築以後経年による土砂の自然崩落層があり、その層位中に基底面を設けて石積みを行ったものと推察します。

石積みは2～3段ですが、背後の裏込め層のみ確認できる部分も多く本来3段積みだった可能性もあります。石は河川玉石で横長に配置した1段目に斜めに傾ける「矢羽積み」に近い工法をとっており、江戸時代中ごろ以降の補修のあとと推測します。文献記録では、寛政六年(1794)に本丸北不明門石垣の修理が記録されているため、関連性があるのかもしれません。